下口唇に発生した脂肪腫の1例

倉地 洋一・木村 享・木村 義孝・桜田 重世
南雲 正男・榎本 昭二・立川 哲彦*

A case of lipoma of the lower lip

Yoichi KURACHI・Toru KIMURA・Yoshitaka KIMURA・Shigeyo SAKURADA
Masao NAGUMO・Shoji ENOMOTO・Tetsuhiko TACHIKAWA*

緒 言

脂肪腫は脂肪組織よりなる限局性の発育を示す非上皮性良性腫瘍で、主として皮下組織に発生し、口腔領域での発現は比較的まれとされている。口腔領域では頬粘膜、口腔底、舌、口蓋等に発生した症例が報告されているが、今回われわれは、下口唇に発生した脂肪腫を経験したのでその概要を報告する。

症 例

患 者：54歳 女性。

初 診：昭和53年10月■日。

主 訴：右側下口唇の腫脹。

家族歴：特記すべき事項はない。

既往歴：8年前より 高血圧 にて 降圧剤を服用している。

現病歴：8年前、右側下口唇粘膜に小豆大の腫瘤に気づき、近所の外科医院を受診したが、無痛性のためそのまま放置していた。その後、腫瘤がやや増大傾向を示したため、昭和51年12月、某大学病院を受診し、良性腫瘍を指摘されたが、患者の都合で治療を中断した。昭和53年10月、再び同部の腫瘤が気になり、当大学医学部付属病院を受診し、当科を紹介された。

現 症

全身所見：体格中等度、栄養状態良好で、特に異常は認められない。

口腔外所見：顔貌は右側下口唇がびまん性に腫脹し、拇指頭大の腫瘤が触知されたが、波動は認められず可動性で圧痛はなく、被覆皮膚の色に異常は認められなかった（図1）。

口腔内所見：下顎正中部から4|相当部の下口唇が拇指頭大に腫脹し、境界は比較的明瞭で、硬度は弾性軟で

図 1 顔貌所見

図 2 口腔内所見

昭和大学歯学部第2口腔外科学教室（主任：榎本昭二教授）

* 昭和大学歯学部口腔病理学教室（主任：吉木周作教授）

The Second Department of Oral Surgery,
School of Dentistry, Showa University (Chief:
Prof. Shoji Enomoto)

* Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Showa University (Chief: Prof. Shusaku Yoshiki)

受付日：昭和54年10月25日

表 1 臨床検査成績

臨床検査所見		血清生化学検査	
血液一般		総蛋白	7.4 g/dl
赤血球数	420万/mm ³	A/G 比	1.9
白血球数	4,100/mm ³	TTT	3.2U
血色素量	13.5 g/dl	ZTT	9.3U
Ht 値	37%	GOT	18U
血小板数	21.8万/mm ³	GPT	11U
尿検査		LDH	392U
色 調	清黄	総コレステロール	242 mg/dl
pH	5	中性脂肪	163 mg/dl
比重	1.031	Na	141.6 mEq/l
糖	—	K	3.9 mEq/l
蛋白	—	Cl	99.3 mEq/l
アセトン体	—		
ウロビリノーゲン	—

図 3 手術時所見

図 5 摘出物所見 (断面)

図 4 摘出物所見

図 6 病理組織所見 (H-E 染色, 弱大抵)

圧痛はなく、被覆粘膜はわずかに黄色を帯びていた (図 2)。

臨床検査所見：一般血液検査、血液生化学検査、尿検査は正常であった (表 1)。

処置および経過：試験切除の結果、脂肪腫との病理組織診断を得たので、昭和53年11月■日、GOF 全身麻酔下に腫瘍摘出術を行った。右側下口唇粘膜に約 3 cm の切開を加え、周囲組織を鈍的に剥離し、腫瘍を一塊とし

図 7 病理組織所見 (H-E 染色, 強拡大)

図 9 病理組織所見 (Sudan Black B 染色)

図 8 病理組織所見 (oil red-O 染色)

で摘出した。腫瘍は周囲組織との癒着はなく、薄い被膜に被覆されていた(図3)。

摘出物所見：腫瘍は大きさ 22×20×18 mm のほぼ球形で、表面は平滑で一部に凹凸があり、線維性の被膜に包まれ、黄赤色を呈し、硬度は弾性軟を示した(図4)。断面は円滑、黄色調で光沢があり、脂肪様物質で満たされていた(図5)。

病理組織学的所見：H-E 染色では、腫瘍の表面は薄い線維性結合組織で被われ、その深層は大小不同の成熟した脂肪細胞よりなり、間質には小血管を伴った線維性結合組織がみられた(図6, 7)。oil red-O 染色では、脂肪が橙色に(図8)、Sudan Black B 染色では、暗紫色(図9)に染まった無数の脂肪滴が認められた。

病理組織学的診断：脂肪腫。

術後約1年経過した現在、再発傾向もなく経過良好である。

考 察

脂肪腫は、脂肪組織あるいは脂肪細胞に由来する非上皮性の良性腫瘍で、脂肪組織の存在するところはどこに

でも発生し、頸部、背部、肩部、腹壁、臀部等の皮下組織が好発部位であり、呼吸器、消化器の粘膜、随意筋や筋膜、関節包にもみられる。口腔領域での発生頻度は比較的少なく、Geschickter¹⁾は脂肪腫 490 例中、口腔領域のものは3例だけと報告しており、Simpson²⁾は口腔内良性腫瘍 117 例中7例の脂肪腫をみており、Wehrle³⁾は180 例中4例の脂肪腫を経験したと報告している。本邦においては、朱雀ら⁴⁾は病理組織学的に検索した口腔領域の腫瘍 266 例中脂肪腫は1例と、岡野ら⁵⁾は良性腫瘍 666 例中10例の脂肪腫を経験したと報告している。

口腔領域での脂肪腫の報告例は比較的少なく、著者が国内文献を渉猟した範囲では、表2のように63例で^{4,5,11-57)}、発生年齢は生後40日²⁸⁾から79歳²⁰⁾にわたり、50歳代、60歳代に多い傾向があり、平均47.7歳であった。Anderson⁶⁾は40から50歳代に40~50%がみられるとし、Bergensfolzt⁷⁾は30から50歳代に多いと、MacGregor ら⁸⁾は50歳代、40歳代、60歳代の順に多くみられたと報告しており、ほぼ同じ傾向を示していた。

性差に関しては、Seldin ら⁹⁾は女性14例、男性10例と女性にやや多いと報告し、Hatziotis¹⁰⁾の報告では、男性68例、女性57例と男性がやや多く、MacGregor ら⁸⁾は男性31例、女性26例、Simpson²⁾は女性4例、男性3例と報告し、報告者により一定ではない。本邦の63例では、女性41例、男性22例で(2:1)女性に多い傾向を示している。

口腔領域での発生部位は、頬粘膜、口腔底、舌、歯肉頬移行部、口蓋等が好発部位とされている。Hatziotis¹⁰⁾によると、145例中頬部46例、舌28例、口腔底21例、頬溝部18例、口蓋18例、口唇9例、歯肉8例、不明2例と報告し、MacGregor ら⁸⁾は57例中頬部24例、舌11例、口腔底8例、口唇6例、その他8例にみられたと報告している。国内での63例では、頬粘膜20例、口腔底10例、舌下部6例、舌6例、歯肉頬移行部6例、口蓋5例、口唇2例、その他8例で、頬粘膜口腔底、舌、舌下部、歯肉頬移行部、口蓋に多い傾向を示しており、今回報告の

表 2 本邦における口腔領域の脂肪腫報告例

発表年	報 告 者	年	性	部 位	大 き さ (cm)
1935	横井 稔 ¹¹⁾	68	♀	右下口唇	桜桃大
1937	高崎琢男, 他 ¹²⁾	50	♀	軟口蓋	鶏卵大
1941	礼山 徹 ¹³⁾	9 か月	♂	両側頬粘膜	雀卵大
1948	小畑芳美 ¹⁴⁾	36	♀	歯 肉	示指頭大
1953	野津邦雄 ¹⁵⁾	35	♂	頬粘膜	4.5×7.0
1955	田島時博, 他 ¹⁶⁾	50	♀	歯肉頬移行部	拇指頭大
1960	市川辰己 ¹⁷⁾ (会)	64	♂	口腔底	手拳大 8×6
1961	田中 順 ¹⁸⁾	60	♀	頬粘膜	1.5×1.0×1.2
1961	小淵貞夫 ¹⁹⁾	60	♂	口腔底	2.0×1.3
1962	林 四郎, 他 ²⁰⁾ (会)	79	♀	口腔底	鶏卵大
1963	加藤純彦, 他 ²¹⁾	2	♀	軟口蓋	拇指頭大
1963	岡本 治, 他 ²²⁾	63	♀	舌下部	拇指頭大 2.4×1.5
1963	小川克二 ²³⁾ (会)	67	♂	舌	鶏卵大
1963	大井一正, 他 ²⁴⁾	17	♀	口腔底	鶯卵大
1964	間仁田恭一, 他 ²⁵⁾	3	♀	頬粘膜	2.3×1.0×1.5
1964	間仁田恭一, 他 ²⁵⁾	15	♂	頬粘膜	雀卵大
1964	間仁田恭一, 他 ²⁵⁾	64	♀	歯肉頬移行部	鶏卵大
1964	宇都宮和喜 ²⁶⁾ (会)	23	♀	舌下部	鶏卵大
1964	細川雅敏 ²⁷⁾ (会)	75	♂	軟口蓋	3.2×3.3×2.6
1965	高橋忠彦 ²⁸⁾ (会)	40日	♀	舌 背	示指頭大
1965	高橋忠彦 ²⁸⁾ (会)	75	♂	舌	拇指頭大
1966	野井倉武憲 ²⁹⁾ (会)	69	♀	舌	拇指頭大
1967	山田孝良, 他 ³⁰⁾	56	♂	頬粘膜	2.8×2.3
1967	山田孝良, 他 ³⁰⁾	37	♂	頬粘膜	3.5×2.5
1967	梶山 稔, 他 ³¹⁾	32	♀	顎下部	3×4×2
1967	梶山 稔, 他 ³¹⁾	67	♂	頬粘膜	2×1×3
1967	朱雀直道, 他 ⁴⁾	65	♂	頬粘膜	3.0×2.4×1.5
1967	朱雀直道, 他 ⁴⁾	56	♀	頬粘膜	2×2×2
1968	荻原 力, 他 ³²⁾	58	♀	顎下部	7×5×5
1969	滝川富雄, 他 ³³⁾	56	♂	歯肉頬移行部	胡桃大
1969	滝川富雄, 他 ³³⁾	60	♀	口腔底	3×1.5
1969	滝川富雄, 他 ³³⁾	42	♀	歯肉頬移行部	2×2
1969	滝川富雄, 他 ³³⁾	41	♀	歯肉頬移行部	1.5×1.5
1969	滝川富雄, 他 ³³⁾	53	♂	外頬部	3.5×2.5
1970	柴田重雄, 他 ³⁴⁾	54	♀	舌下部 (口底)	4.0×2.5×1
1970	中村保夫, 他 ³⁵⁾ (会)	63	♀	舌下部	5×3×1.5
1971	亀山嘉光 ³⁶⁾ (会)	72	♀	舌下部	5×4×2
1973	田中広一, 他 ³⁷⁾ (会)	38	♀	口腔底	手拳大
1973	大屋高德, 他 ³⁸⁾ (会)	54	♀	頬粘膜	1.7×2.8×2.0
1973	久野吉雄, 他 ³⁹⁾	45	♂	歯 肉	示指頭大
1973	中室嘉康, 他 ⁴⁰⁾	21	♀	頬粘膜	5×2×2
1974	豊島昭治, 他 ⁴¹⁾ (会)	26	♀	口腔底	7.3×4.4×2.7
1975	飯田 武, 他 ⁴²⁾ (会)	61	♀	口腔底	鶯卵大
1975	伊藤泰蔵, 他 ⁴³⁾ (会)	55	♀	口腔底	5.2×7.4×4.0
1976	関田俊介, 他 ⁴⁴⁾	63	♂	オトガイ下部	6×2.5×2.5
1976	関田俊介, 他 ⁴⁴⁾	71	♀	舌下部	小指頭大

表 2 つづき

発表年	報 告 者	年	性	部 位	大 き さ (cm)
1976	佐藤正一郎, 他 ⁶⁰⁾ (会)	64	♂	オートガイ部	2.6×1.8×1.6
1976	小沢孝雄, 他 ⁴⁶⁾ (会)	64	♀	頬粘膜	4.7×3.2×3.0
1977	橋本賢二, 他 ⁴⁷⁾	55	♀	口腔底	5.2×7.4×4.0
1977	高野伸夫, 他 ⁴⁸⁾	63	♀	頬粘膜	3.8×3.2×2.8
1977	高野伸夫, 他 ⁴⁸⁾	78	♀	頬粘膜	3.2×2.8×2.5
1978	藤好ふみ子, 他 ⁴⁹⁾	77	♂	舌	2.0×1.5×1.5
1978	真喜屋恒代, 他 ⁵⁴⁾	45	♂	歯肉頬移行部	4.0×3.5×3.0
1978	真喜屋恒代, 他 ⁵⁴⁾	30	♂	頬粘膜	3.4×2.5×2.0
1978	後藤 潤, 他 ⁵⁰⁾ (会)	39	♀	舌	3.8×3
1978	佐藤正一郎, 他 ⁴⁵⁾ (会)	69	♀	口蓋部	1.9×1.5×1.7
1979	内田 稔 ⁵¹⁾	37	♀	頬粘膜	2.8×1.6×2.2
1979	川原秀樹, 他 ⁵²⁾	1歳6か月	♀	頬粘膜	2.0×1.2×0.7
1979	岡野昌治, 他 ⁵⁾	11	♂	頬粘膜	4.0×3.0×1.0
1979	群家常雄, 他 ⁵³⁾ (会)	55	♂	顎下部	
1979	鶴野一洋, 他 ⁵⁴⁾ (会)	34	♀	口 蓋	小指頭大
1979	三科正見, 他 ⁵⁶⁾ (会)	2歳6か月	♀	頬粘膜	2×1×1 拇指頭大
1979	倉地洋一, 他 ⁵⁷⁾ (会)	54	♀	右下口唇	拇指頭大

口唇での発生は比較のまれなものと考えられる。

大きさは一般に小さく、拇指頭大から鶏卵大のものが多く、重量も数gから数10gのものが多いが、田中¹⁸⁾の手拳大、95gの口腔底の1例、飯田ら⁴²⁾の鶏卵大、100gの口腔底の1例などの大きなものの報告もみられる。

発育は一般に緩慢で、自覚症状が少ないため放置されることが多く、経過は数年に及ぶものが多いようである。長いものでは横井¹¹⁾の31年間に粟粒大から桜桃大になった下口唇の1例、高崎ら¹²⁾の28年間に鶏卵大になった口蓋の1例や Bruce ら⁵⁸⁾の21年間に及ぶ例もある。今回のわれわれの症例は、8年前の小豆大の腫瘍が拇指頭大に増大し、かなり緩慢な発育を示していた。

組織学的には、その実質が成熟した脂肪組織からなり、腫瘍組織は線維性の結合組織索で分葉状に分けられていることが多い。線維組織の多いものは線維脂肪腫(fibro lipoma)、血管に富んでいるものは血管性脂肪腫(angio lipoma)と呼ばれており、さらに腫瘍組織内に化生骨組織を認めた化骨性脂肪腫(lipoma with osseous metaplasia)もみられている¹⁸⁾。本例では、腫瘍組織内に線維性組織が少なく、典型的な脂肪腫の組織像であった。

本腫瘍の組織発生に関しては、異所発生説、過形成説などがあり、その成因については慢性的刺激、外傷、遺伝、内分泌失調などが論じられているが¹⁸⁾、刺激説が有力な説と考えている⁴⁷⁾。本症例においては、このような要因と思われる事項は明らかでなかった。

予後は、良性腫瘍で、全摘出すれば再発することはないといわれているが、まれに再発性脂肪腫で再発を繰り返す例や、悪性化する例も報告されている⁵⁹⁾。

本症例では被膜ごと全摘出し、術後約1年たった現在、再発の徴候もなく、経過良好である。

結 語

54歳、女性の右側下口唇に発生した脂肪腫の1例を経験したので、その概要を報告した。

なお本論文の要旨は、第113回日本口腔外科学会関東地方会において報告した。

引 用 文 献

- 1) Geschickter, C.F.: Lipoid tumors. Amer J Cancer 21: 617 1934.
- 2) Simpson, H.E.: Lipoma of oral cavity. report of seven cases. OS OM OP 12: 349 1959.
- 3) Wehrle, D.P., et al: Lipoma of the oral cavity; report of four cases. OS OM OP 20: 138 1965.
- 4) 朱雀直道, 他: 頬粘膜下に発生した脂肪腫の2症例. 口科誌 16: 499 1967.
- 5) 岡野昌治, 他: 若年者の頬部に見られた粘液脂肪腫の1例. 日口外誌 25: 549 1979.
- 6) Anderson, W.A.D.: Pathology 1. ed 6, Mosby Co, St Louis, 1971, p 573.
- 7) Bergenholtz, A., Thilander, H.: Lipoma of the oral cavity. OS OM OP 13: 767 1960.
- 8) MacGregor, A.J., Dyson, D.P.: Oral lipoma.

- OS OM OP 21: 770 1966.
- 9) Seldin, H.M., et al.: Lipomas of oral cavity: report of 26 cases. J. Oral Surg 25: 270 1967.
 - 10) Hatziotis, J. Ch.: Lipoma of the oral cavity. OS OM OP 31: 511 1971.
 - 11) 横井 稔: 口唇脂肪腫ノ一例. 大日本耳鼻咽喉科学会会報 41: 1554 1935.
 - 12) 高崎琢男, 他: 口腔ノ後半部ヲ充タセル巨大ナル脂肪腫ノ一例. 耳喉 10: 436 1937.
 - 13) 元山 徹: 対側性頬粘膜下脂肪腫の1例. 耳鼻咽喉科臨床 36: 509 1941.
 - 14) 小畑芳美: 歯肉粘膜下に発生した脂肪腫の1例について. 歯科学雑誌 5: 95 1948.
 - 15) 野津邦雄: 多発性瀰漫性脂肪腫の1例. 通信医学 5: 453 1953.
 - 16) 田島時博, 他: 口腔内脂肪腫の症例に就て. 口科誌 4: 376 1955.
 - 17) 市川辰己: 口底脂肪腫の一例について(会). 日口外誌 6: 534 1960.
 - 18) 田中 順: 頬粘膜に生じた線維性脂肪腫の1例. 口病誌 28: 251 1961.
 - 19) 小淵貞夫: 口腔底に発生した稀有なる脂肪腫の一例. 長崎医学会雑誌 31: 125 1956.
 - 20) 林 四郎, 他: 口腔底脂肪腫の1例(会). 日耳鼻 65: 245 1962.
 - 21) 加藤純彦, 他: 口蓋脂肪腫の一例. 耳鼻臨床 56: 375 1963.
 - 22) 岡本 治, 他: 臨床診断において皮様嚢胞と誤診した脂肪腫の1例. 歯科学報 63: 749 1963.
 - 23) 小川克二: 舌脂肪腫1症例(会). 日耳鼻 66: 1580 1963.
 - 24) 大井一正, 他: 口腔底に発現した巨大な脂肪腫の1例(会). 歯科学報 63: 362 1963.
 - 25) 間仁田恭一, 他: 口腔の線維性脂肪腫について. 日口外誌 10: 231 1964.
 - 26) 宇都宮和喜: 巨大なる脂肪腫の1例(会). 日赤医学 16: 246 1964.
 - 27) 細川雅敏: 口蓋脂肪腫の1症例(会). 日耳鼻 67: 1041 1964.
 - 28) 高橋忠彦: 舌脂肪腫の2例(会). 日耳鼻 68: 1063 1965.
 - 29) 野井倉武憲: 舌に生じた脂肪腫の一例. 日本歯科評論 287: 97 1966.
 - 30) 山田孝良, 他: 脂肪腫の2例について. 日口外誌 13: 348 1967.
 - 31) 梶山 稔, 他: 脂肪腫の2例. 九州歯会誌 21: 34 1967.
 - 32) 荻原 力, 他: 舌下部及び顎下部にみた脂肪腫と皮様嚢胞. 日口外誌 14: 145 1968.
 - 33) 滝川富雄, 他: 口腔外科領域に生ずる脂肪腫について. 日大歯学 43: 472 1969.
 - 34) 柴田重雄, 他: 口底部 Fibro lipoma の1例. 口科誌 19: 737 1970.
 - 35) 中村保夫, 他: 口腔底にみられた脂肪腫の1例(会). 日口外誌 16: 245 1970.
 - 36) 亀山嘉光: 舌下部の類皮嚢胞を想わせる大なる脂肪腫の1例(会). 日口外誌 17: 569 1971.
 - 37) 田中広一, 他: 巨大な口腔脂肪腫の1例(会). 口科誌 22: 677 1973.
 - 38) 大屋高德, 他: 頬粘膜部に発生した脂肪腫の1症例. 日口外誌 19: 720 1973.
 - 39) 久野吉雄, 他: 歯肉に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 19: 651 1973.
 - 40) 中室嘉康, 他: 左側頬粘膜下に発生した単純性脂肪腫の一例. 歯科医学 36: 674 1973.
 - 41) 豊嶋昭治, 他: 口腔底に発現した巨大な脂肪腫の1例(会). 日口外誌 20: 772 1974.
 - 42) 飯田 武, 他: 口腔底部に発生した巨大な脂肪腫の1例(会). 日口外誌 21: 861 1975.
 - 43) 伊藤泰敏, 他: 右口腔底に発生した脂肪腫の1例(会). 日口外誌 21: 861 1975.
 - 44) 関田俊介, 他: 脂肪腫の2例. 鶴見歯学 2: 69 1976.
 - 45) 佐藤正一郎, 他: 口蓋に発生した Fibro lipoma の1例(会). 日口外誌 24: 1339 1978.
 - 46) 小沢孝雄, 他: 左側頬粘膜部に発生した脂肪腫の1例(会). 日口外誌 22: 967 1976.
 - 47) 橋本賢二, 他: 口腔底脂肪腫の1例. 日口外誌 23: 837 1977.
 - 48) 高野伸夫, 他: 頬部脂肪腫の2例. 日口外誌 23: 569 1977.
 - 49) 藤好ふみ子, 他: 舌に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 24: 575 1978.
 - 50) 後藤 潤, 他: 舌にみられた骨・軟骨を有する脂肪腫の1例(会). 口科誌 27: 454 1978.
 - 51) 内田 稔, 他: 左側頬粘膜部に発生した脂肪腫の1症例. 日口外誌 25: 714 1979.
 - 52) 川原秀樹, 他: 幼児の頬部に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 25: 886 1979.
 - 53) 群家常雄, 他: 顎下部にみられた脂肪腫の1例(会). 日口外誌 25: 956 1979.
 - 54) 真喜屋恒代, 他: 頬部に生じた脂肪腫の2例. 口科誌 27: 97 1978.
 - 55) 鶴野一洋, 他: 口蓋垂に発生した脂肪腫の1例(会). 日口外誌 25: 956 1979.
 - 56) 三科正見, 他: 幼児の頬粘膜に発生した脂肪腫の一例(会). 第33回日本口腔科学会総会抄録集 49 1979.
 - 57) 倉地洋一, 他: 下口唇にみられた脂肪腫の1例(会). 日口外誌 25: 733 1979.
 - 58) Bruce, K.W., Royer, R.Q.: Lipoma of oral cavity. OS OM OP 7: 930 1954.
 - 59) Weil, P: 47) より引用.
 - 60) 佐藤正一郎, 他: 下顎オトガイ部(正中部)に発生した脂肪腫の1例(会). 日口外誌 22: 967 1976.